地方分権の国スペイン

片木 淳

(自治省公営企業第一課長)

このたびマドリードを訪れる機会があった。今回は、特に現地駐在の方々の話をうかがうことができ、すっかりスペインファンになってしまったので、その一端を紹介する。

◎ バスク地方

故ニクソン元大統領の名著「指導者とは」の中に次のような一節がある。

「土佐は木樵や舟乗りを多く出した地方で、そこの人々は協調と謙譲を重んじる日本にあって、不羈かつ粗剛の性格で知られている。いわば日本のバスク地方。吉田も土佐っぽらしく不羈、粗剛であり、晩年には独断的な政府運営により『ワンマン宰相』の異名をほしいままにした。」

バスク地方は、ピレネー山脈の西、カンタブリア海を望み、一部フランスにまたがる。人口は約80万人。バスク語は、インド・ヨーロッパ語族に属さず、コーカサス山脈中にある狭い地域を除き、地球上のどの国の言語とも異質で全く類似性がないといわれている。バスク語は、氷河期以前の洞窟言語（穴居人の言葉）のなごりらしく、「ナイフ」のことを「も

のを切る石」といい、「天井」を「洞窟の屋根」という（「ベルリッツの世界言語百科」）。ブラド美術館で見ることができるとおり、生涯にあれほど画風が変わった画家も珍しいが（ピカソもそうであるが）、ゴヤにもバスク人の血が流れている。堀田善衛氏は、ソ連（当時）のこれまたコーカサス地方のグルジア共和国を訪ねたときに、首都トビリシ市のたたずまいが、「あまりにも、本当にあっと驚くほどに」バスク地方に似ていたと書かれている（同「ゴヤ I スペイン・光と影」）。

◎ ETA

1939年スペイン内乱に勝利したフランコは、独裁体制をひき、秩序統制を最優先する抑圧政策をとった。政党および労働組合の結成は厳禁となり、集会、結社、表現の自由は制限されたのである。内乱前の第2共和政下での地方分権の流れも断たれ、古くから民族自立を求めるバスクやカタルーニャの地方自治権確立運動は弾圧され、バスク語やカタルーニャ語の使用も禁じられた。このような中で、

海外みたりきいたり

1959年に結成されたE T A（バスク祖国と自由）は、フランコ体制を打倒して、バスク地方を解放、独立させることをめざして頻りにテロを繰り返すこととなり、現在に至っている。小生の訪れた9月にも、マドリッド市内で爆弾テロがあったとのことである。

バスク地方の独立をかかげる地方政党としては、バスク国民党PNVと民衆連合HBの二つがあるが、陰に陽にE T Aを支持するHBは、現在でも、国会議員を3名（下院2、上院1）出し、市町村でも相当の勢力を有している。

◎ ゴンザレス首相と社会労働党政権

現在、スペインの第一党は社会労働党（PSOE、下院350議席のうち159議席）、第二党は国民党（PP、同141）である。独裁体制下で共産党同様非合法政党であった社会労働党は、民主化後わずか7年で政権を獲得し、いろいろと苦勞を重ねながらもスペインの現実政治の責任を担ってきた。

現首相フェリーペ・ゴンザレスは、1942年セビーリア郊外の農家の生まれ。セビーリア大学法学部入学後、青年社会主義同盟、次いで社会労働党に加入、卒業後は弁護士として活動、1974年わずか32歳で党の書記長に選出され、一躍その名が知られることとなった。

1979年、ゴンザレスの孤軍奮闘的な努力により、社会労働党は、マルクス主義を放棄し、以後、中産階級化する経済社会構造の中で、賃金抑制を含む新自由主

義経済政策の推進など国民党としての現実的な考え方により、今日まで政権を担ってきている。（戸門一衛「スペインの実験」）。

最近においては、悪化する経済状況、E C統合問題、政権内部からのあいつぐ汚職等により、苦悩の色が深く、本年6月の欧州議会選挙で敗北するなど、若い指導者アスナルのもとでイメージ・チェンジに成功した国民党の厳しい追い上げを受けている。

◎ 地方分権の国スペイン

バスク地方の存在に見られるように、スペインと一口にいても、実際は一種の他民族国家であり、地方地方が個性を有する地方分権的な国家なのである。歴史的にも、まず現住ケルト系民族に北アフリカ系のイベロ族が加わった。次いでフェニキア、ギリシャ、ローマ人の時代となり、5世紀には西ゴート族に征服され、8世紀からは800年間にわたりアラビア人たちに支配された。現用スペイン語の単語のうち10%は、アラブ語に語源があるのだそうである。スペイン出身の哲学者オルテガをして「近代の国民国家は、本来異質のいくつかの地域集団、人種集団が、ある一つの国民的共同プロジェクトに共鳴し、相互に国民としての連帯感が芽生えることによって形成される。」とし、また、フランスはフランク族、スペインは西ゴート族、イタリアは東ゴート族といずれもゲルマン人に征服され、今日にいたるまで、ラテン系諸国

海外みたりきいたり

において、支配階級、指導階級、知識階級など社会の上層部を占めているのは圧倒的にゲルマン系であり、「われわれは、本質的に純粋ならざる人種である。」といわしめた所以である（色摩力夫「オルテガ」）。

現在、スペインには、17の州と50の県がある。バスク州とならぶ独立意識の強さを有し、バルセロナ・オリンピックで記憶に新しいカタルーニャ、オレンジのバレンシア、フラメンコと太陽海岸のアンダルシア、ゴヤを出した伝統のアラゴン、ドンキーホーテのカスティーリア・ラ・マンチャ州（「ラ・マンチャ」はアラビア語で「乾いた大地」の意味）などが日本人にはおなじみである。

独裁体制崩壊後、地方分権化を進めるため、新たに州(Comunidad Autonoma 自治共同体)を結成せしめ、段階的に国家権限を移譲していくという方式がとられた。また、これにともないカタルーニャ語やバスク語などの独自言語も復権した。今日では、スペイン語（カスティーリア語）にかわって学校教育はもちろんのことあらゆる市民生活の中に定着している。先般のオリンピックでは、ファン・カルロス一世国王が開会宣言の冒頭カタルーニャ語で「バルセロナによるこそ！」といわれたとのことである（武田修「スペイン人と日本人」）。

現在、17州は、過去長年にわたり地方特権を認められてきた特別州（バスク州及びナバラ州）とそれ以外の15の普通州に分かれている。15州は、また、第一段

階で地方自治政府への転換を選択したバレンシア、カタルーニャ、ガリシア、アンダルシア及びカナリー諸島の5州と、第二段階を選択した残り10州に分かれる。国の権限は、国防、外交、貿易関係、マクロ経済政策等に限られ、その他の権限は、州の希望にしたがって地方へ委譲されることとなったのである。特別州の2州と第一段階の普通州5州は、最大限の自治権を選択し、教育文化、公共投資、医療保険、都市計画、社会福祉等の行政を行っている。第二段階の10州は、まだ多くを国に依存している状態であるが、着々と権限委譲が進められている。バスク州とカタルーニャ州を先頭に全州が自治権を拡大する方向にあるのである。

各州は、もちろん財政権限も有し、我が国と同様投資目的のものに制限はされているが、起債も行っている。ムーディ社の格付けによれば、バレンシア州とアンダルシア州はA a 3、バスク州はA a 2、カタルーニャ州はA 1などとなっており（東京銀行マドリード支社「ムーディズレポート スペイン地方自治政府」）、G 8と呼ばれる経済大国スペインの、今後益々拡大する傾向にある市場として、世界の金融界の注目を浴びているとのことである。